Faculty of Informatics, Shizuoka University
Newsletter, vol.3, October, 2009

Joy風

vol.3
October 2009
静岡大学情報学部
http://www.inf.shizuoka.ac.jp/

平成21年度入学式・保護者懇談会が開催されました

情報学部学生委員長　田中宏和

4月7日、平成21年度の入学式が、静岡県コンベンションセンター「グランシップ」にて執り行われ、情報学部では情報科学科102名、情報社会学科107名、計209名の新入生が新たに学部生として加わりました。

入学式終了後は、同会場にて、新入生の保護者の皆様を対象とした懇談会を開催いたしました。170名の保護者の皆様にご参加いただき、学部長始め、情報科学科学科長、情報社会学科学科長、教務委員長、学生委員長、キャリア支援室長から、情報学部の現状、教育、学生生活、就職等の説明をさせていただきました。

当日の保護者のアンケートでは（152名分回収）、多くの方から「入学式が有意義であった」（53.9%）、「保護者懇談会が有意義であった」（76.3%）とのご回答をいただきました。ご協力に心から感謝するとともに、今後ともなお一層のご理解とご支援をお願いいたします。

▲新入生保護者懇談会（2009/4/7）

なお情報学部では、2009年11月14、15日に静岡大学城北キャンパス（浜松）で開催されるテクノフェスタ・静大祭 in 浜松に合わせ、11月14日（土）に「情報学部秋季保護者懇談会」を開催いたします。この懇談会は学部1年生～4年生の保護者の皆様を対象とするもので、全体説明と学科の紹介、学業、学生生活などの説明と報告を行います。指導教員との個別面談の機会もご希望に応じて設定いたしますので、ぜひご参加ください。参加の方法については、保護者の皆様には郵送にてご案内させていただきます。

新入生歓迎合宿 イン伊良湖

情報学部学生委員長　田中宏和

4月18日（土）、19日（日）、愛知県渥美半島の先端に位置する国民休暇村伊良湖で新入生歓迎合宿が開催されました。企画から運営まで、スタッフは2、3年生の有志学生が中心となって担当するのが恒例となっており、今年のスタッフ数は約30名にも上りました。

1年生の時に受けた感激・充実感を後輩に引き継ぐべく集結した、モチベーションの高い先輩たちが計画してくれたイベントが盛り上がらない筈はなく、天候にも恵まれ、バーベキュー、リクレーション、スポーツ、ナイトウォーキング、そして夜の懇親会などをしながら、新入生同士、そして先輩後輩間の親睦を深めてもらうことができました。1年生たちもこの合宿を通じてお互いにうち解けることができ、大学生活の第一歩としての2日間を有意義に過ごすことができました。

▲バーベキューを楽しむ1年生たち（2009/4/18）

▲休暇村到着直後（2009/4/18）

夏季オープンキャンパスが開催されました

情報学部広報委員長　山田文康

夏のオープンキャンパスが、8月7日（金）に開かれ、昨年よりも100名多い575名の方が参加されました。参加者は高校生、卒業生、保護者、高校の教員などで、その他にマレーシアなどからの留学希望の外国人も含まれていました。

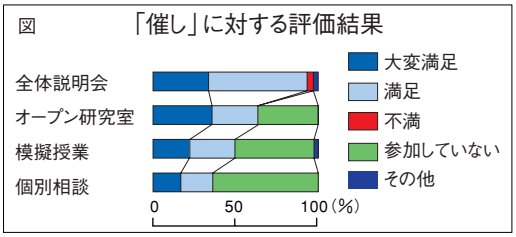
オープンキャンパスでは、全体説明会、2名の教員による模擬授業、10研究室による研究活動体験（オープン研究室）、入試に関する個別相談会を行いました。全体説明会では、担当委員会による教務、入試、就職についての説明に加えて、学生の視点からの学部紹介ということで、8名の現役学生に大学生活全般について彼らが体験し、実感していることを話してもらいました。なお全体説明会の会場に入れなかった方のために、他教室に用意したスクリーンに会場の様子を中継放映しましたが、その設備の設置・運用は全て学生が担当しています。

参加者の印象は概ね良好で、アンケート調査（回答者数75）によれば、学部・学科の特色、入試、学生生活、就職など全ての側面で、「十分に情報を得られた」、「大体の情報は得られた」とする方が9割を超えていました。また、図（「催し」に対する評価結果）に示すように、参加された方のほとんどが「大変満足」「満足」と回答されています。ただし、実際には「オープン研究室」では4割弱、「模擬授業」では5割近くの方が参加していません。より多くの方に体験して頂くためには、「オープン研究

▲夏季オープンキャンパス（2009/8/5）

室」、「模擬授業」の数を増やす必要があります。また自由回答には、「案内が少ない」、「学生の話をもっと聞きたい」などのご要望もありましたので、来年はこれらの意見を参考に、より良いイベントにしたいと考えています。今後ともご協力・ご意見等よろしくお願いいたします。なお、テクノフェスタ・静大祭 in 浜松の初日（11月14日）には、「情報学アラカルト講座」と題して、4名の教員が情報学の旬のテーマで講義をすることになっています。ぜひお出かけください。

図　「催し」に対する評価結果



1年生のキャンパスライフ

視野を広げるために

情報社会学科1年　荻野千夏

静岡大学情報学部に入学して驚いたこと、それは、やりたいこと・目標を持っている人が予想以上に多かったことです。入りたいゼミが決まっている人、将来に向けたアプローチを始めている人、留学や資格取得のための準備をしている人。彼らは私に、視野を広げるきっかけをくれました。それは、「情報学部はさまざまな分野に手を広げることができる」ということです。

私は、SEになりたくて情報学部を選びました。物の見方が一方的であることが欠点であることも自覚していました。そのため、一年生の前期では、興味を持った分野には次々と手を広げました。新入生セミナーで学んだ「ジェンダー」関連の本や映画を自主的に見たこと、日本語表現法の自主ゼミで「人に読んでいただける・人を惹きつける文章」を書くために必死になったことは、特に頑張ったことです。

友達と過ごす時間が増えたことで、自分が動きだせるきっかけも多くなりました。旅行を始めとした遊びから、将来について話すということに至るまで、大切な時間を手に入れることができました。

大学に入ったからこそできることはたくさんあります。無駄な時間は少しもありません。大学生活を楽しむこと、自分の肥やしになるものに対して、自分なりに取り組んでいきたいです。

キャンパスライフがはじまって

情報科学科1年　望月希美

2009年4月、わたしの静岡大学でのキャンパスライフは始まりました。大学生活は今までの生活とまったく違います。いろいろなことがいい意味でも悪い意味でも自由なため、ほとんどの物事が自分の責任によって決まってしまいます。授業の時間も、小、中、高校のときのように、何時間かの決められた授業をやるのではなく、自分でどの授業をとるのかを決めて登録しなければなりません。最初はわからないことだらけで、不安とストレスばかり感じていました。でも友達とお互いに教えあったので、とりたい授業はすべてとることができたし、授業内容でわからないことも一緒に勉強したりして単位をとることができました。

わたしが大学生活において大事にしてきたことは、自分のやりたいことをやる、ということです。さきほども述べたとおり、大学生活ではいろいろなことが自由です。わたしはその自由な時間をできるだけ有意義に過ごしたいと思い、自動車学校に通ったり、サークルに入ったりしました。今までやってきた軽音楽の活動を続けたかったし、運動もしたかったので、サークルはNRC（軽音楽サークル）と女子バレー部に入りました。サークルと部活、さらに自動車学校と授業のかけもちはさすがに忙しくて大変な時もありましたが、すべてそれなりに頑張った分、友達や先輩など人とのつながりが増えたし、自分なりにとても充実した日々を送れていると思うので、今はとても満足しています。

夏休みに入って、しっかり免許もとることができ、アルバイトも始めることができました。これからまた忙しい日もあるかもしれませんが、そういう日も後々思い返したときに充実した日々を送ったなと思えるように、これからもがんばっていきたいと思います。

情報ネットワークの研究が新しい社会を創る

情報科学科教授　水野忠則
情報科学科助教　峰野博史

私どもの研究室では、インターネット時代の基幹技術である情報ネットワークに焦点を当て、新しい情報処理社会システムの創製、開発に関する研究を行っております。特にワイヤレス通信技術の側面からこれからのモバイル社会の実現を目指す『異種ネットワーク連携グループ』と、世の中のいたるところにノードを設置して情報を発見したり、制御に反映させたりすることで、より人間に優しい情報化社会の実現を目指す『ユビキタスコンピューティンググループ』の2グループによって、次に来るべき新時代の情報化社会の発展を支えるような研究を、世の中の新しい動きを先導して進めています。

最近では、温室効果ガスの削減及び化石燃料の使用合理化の観点から省エネルギー対策の強化が求められており、民生部門では、人々の生活が豊かさを求めるライフスタイルへ変化し、エネルギー消費が継続的に増加していることから、BEMS（Building and Energy Management System）/HEMS（Home Energy Management System）の開発・導入によるオフィスや家庭での省エネルギー対策が最重要課題の一つとなっています。

▲研究成果のデモ風景

そこで、文部科学省知的クラスター創成事業にて研究開発を進めてきた自律分散協調ユビキタスセンサネットワーク技術と、PUCC（Peer-to-peer Universal Computing Consortium）のセンサデバイス制御ワーキンググループにおける研究活動成果を融合することで、通信ネットワークを新たに構築するのが困難だった既存構造物などにおいても、区域内に置かれた複数のセンサを省電力無線通信規格ZigBeeや電力線通信PLC（Power Line Communication）を併用することで通信可能なエリアを相互に補完し合うように自律的にオーバレイセンサネットワークを形成する技術を開発しました。さらに、各家庭によって異なる生活環境に適応的に導入でき、きめ細かな自動制御をカスタマイズできるよう生活者の行動様式や好みを適応的に考慮した「快適な生活」を損なわない省エネ機能を提供する適応型HEMSの研究開発を進めています。

このような研究活動を通じて、私ども研究室では、『自主性とリーダシップで新しい分野を切り開いてほしい』という理念の下に、教員の企業での経験（水野は三菱電機、峰野はNTT）を活かし、現況の問題点を把握したうえで、それをいかに打破していくか、社会でどのように役立てていくかを提案し、学生自らが実体験できる形で指導しています。

また、大学や研究室における様々なイベント、企業との共同研究打合せ（NTTドコモ、三菱電機、ルネサスソリューションズ、浜松テクノポリス推進機構、PUCCなど）、国内外での対外発表などを通して、自主性を持ち、かつ周りの人を巻き込みながら、新しい分野を切り開いていくことができるような人材を育てていきたいと思っています。

研究室の最近の特筆すべき内容として、国際会議発表と表彰があります。国際会議は、この10年間で142件、表彰は70件に上っています。ほとんどの学生が国際会議発表・表彰を経験していることになります。研究室配属時には想像もつかなかった成長を見守りながら、将来への期待と夢を膨らませて社会へ巣立っていってほしいと思っています。

▲ラスベガスでの会議にて

当研究室の近況はホームページ（http://www.mizulab.net）にて紹介しています。

インターネットが政治をどのように変えるのか

情報社会学科准教授　佐藤哲也

佐藤研究室では、インターネットが政治をどのように変えるのか？というテーマについて研究をすすめています。特に、有権者や市民が政治に参加できるよう、様々なインターネット上の新しいサイトを作成して、その有効性を確かめる実験を行っています。先の民主党が大勝した、今回の総選挙でもいくつかの実験を行いましたので、ご紹介したいと思います。

まだ予測市場というのはほとんどの方にとって聞き慣れない言葉かと思いますが、米国を中心に普及している新しい社会的技術です。株式市場のようなゲームを通じて選挙の結果や経済の動向を予測する手法で、その予測の精度が高いために現在各方面から注目されています。佐藤研では国内でも唯一となる安定した予測市場サイト「shuugi.in（http://shuugi.in）」市場を2008年1月より開設して、今回の総選挙の結果を予測していました。最終的に実験には3千人を超える方のご協力を得て、かなりの精度で結果を予測することができました。今後はこの予測技術を応用して、アンケート調査に代わる新しい世論の計測方法として位置づける研究を進めていきます。選挙は終わりましたが、また次の選挙に向けた実験を開始していますので、インターネットをご利用の方はぜひアクセスしてご参加頂き、ご意見など頂戴できればと思います。

また、佐藤研では日本版ボートマッチというプロジェクトに参加しています。同プロジェクトのサイトは読売新聞社のコンテンツとして掲載されましたので、新聞等でご覧になった方もいらっしゃったかもしれません。ボートマッチとは普段忙しい方や政治のことに詳しくない方でも、いくつかの簡単な政策に関する質問に答えることで、自分と考え方の近い政党を知ることの出来る便利なサイトです。この夏の総選挙では約1ヶ月の間サイトを開設しましたが、のべ12万人を超える方に利用して頂くことができました。このデータを元に、さらに利用しやすいシステムを開発していきます。

上記のいずれのプロジェクトにも、佐藤研内外の大勢の学生が参加・協力してくれています。学生さんたちも、上記のようなインターネットを活用した新しい政治への関わり方を経験していくことにより、インターネットの社会に与える影響を身をもって学んでもらうことが出来たのではないかと自負しています。関係の皆様には今後とも変わらぬご支援、ご協力をお願い出来れば幸いです。

〈著書紹介〉
最近、単著を刊行した情報社会学科の教員2人に著書の紹介をお願いしました。

『サッカーからみる日韓のナショナリティとローカリティ～地域スポーツ実践の場への文化人類学的アプローチ』（御茶の水出版）

情報社会学科准教授　金明美

本書は、2002年に初めて日韓で共催されたサッカーW杯において、マスメディアを通して表象されたナショナリズム（一般的には熱狂的な自国の応援や高揚される国民的一体感）への批判的な問いかけから始まっています。しかし、ナショナリズムをマスメディアが創り出した偏ったイメージとするのではなく、その受け手とされる一般の人々の「国民」意識に着眼し分析しています。「国民」意識は、W杯のような非日常的な場で一時的に鼓舞されても、日常的には意識化されることはなく、「暗黙知」として諸活動に埋め込まれています。そこで本書では、このような「国民」意識や感覚をナショナリティと定義し、日常的なサッカー活動に注目し、その形成過程を、静岡県旧清水市と韓国済州島の西帰浦市でのフィールドワークを通して、具体的に検討しています。

フィールドワークとは、フィールド（現地）で生活し、地域の諸活動への参加やそこでの対話を通して、現地の人々の考え方や意識などを理解していくいわば「異文化」理解の方法です。社会の複雑な諸関係を紐解く上で、このような生身の体を使った現地密着型の「情報」収集の方法は重要だと考えます。

サッカー経験者ではあるが、東京出身の私にとって、日韓の両フィールドはまさに「異文化」でした。これらの「異文化」体験を通して、「地域住民」としての意識（ローカリティ）との関係で「国民」意識のあり方を検討することの有効性や、両国内の地域文化の多様性、国境を越えた共通の文化的基盤への深い理解も可能になりました。

本書が、日韓の国際・民際交流を進める上で意味ある「情報」提供となり、また「情報学」の発展の上で何らかの貢献になれば誠に幸いです。なお本書は博士論文をまとめたもので、情報学部の出版助成の補助を受けています。

『ウィトゲンシュタインの「はしご」～『論考』における「像の理論」と「生の問題」』

（ナカニシヤ出版）

情報社会学科准教授　吉田 寛

情報学部出版助成金の補助を受け、博士論文をまとめた上記の本を3月に出版しました。ウィトゲンシュタインは現代思想にもっとも深く影響を与えた思想家のひとりとされており、その深く独創的な考察は、情報社会を分析するための基本的観点を与えてくれるものです。私の本は、こうした彼の生前に出版された唯一の哲学的著作である『論理哲学論考（論考）』の議論を丁寧に解説・検討しながら、その著者の精神を引き出そうとしたものです。

『論考』という本には、「言語」とは何か、言語で表現される「世界」とはどういうものか、「考える」とはどういうことか、「生きる」とはどういうことか、〈私〉とは何なのかについての、若きウィトゲンシュタインの一貫したビジョンが示されています。それは、ヨーロッパ世界と自らの生命を危機に陥れた第一次大戦の最中で、彼が自らと世界の存在の意味を求めてたどり着いたひとつのビジョンなのです。

情報技術の進展と共に、現代社会は、すくなくとも表面的にはすさまじい勢いで変容しつつあります。この変容の最中で、自分自身と社会に対する一貫したまともなビジョンを持つことはたいへん難しいことだと思います。しかし、まともなビジョンを欠いた社会がいかに流されやすく、それが危険なことであるかは、歴史の教えるところです。私の本が、情報社会を導くしっかりとしたビジョンを形成するための手がかりの一つとして、貢献するところがあれば幸いです。

平成21年度キャリア支援室の取り組みと学生の就活概況

情報学部キャリア支援室長　淺間正通

2008年後半に始まった世界同時不況の余波は日本経済をも直撃し、就職不況は今もってその深刻さを増しています。多くの大学で、今年度の就職内定率（7月時）は例年の2割～3割減と見積もられており、中には5割の落ち込みを見ている所も散見されるほどです。こういった環境変化をいち早く見越して、情報学部では従来の「就職委員会」を改め、「キャリア支援室」に衣替えして対応しています。いわゆる、学生の入口部（早期キャリア意識形成）から出口部（進路決定）までのトータルケアを通じて、彼らの効果的な就職活動展開のための支援を行うのがその狙いです。室員8名体制で、キャリア意識啓発のためのガイダンス・適正検査の実施、企業・官公庁へのインターンシップ派遣、情報系資格取得支援、各種講演会の開催、キャリア支援説明会の開催、OB会組織との連携による情報交換など、系統的かつ多角的な手立てを講じながら難局打開に努めているところです。こういった取り組みが奏功してか、夏休み直前調査（7月末）では学部生80%、大学院生85%が内定を得ており、他大学に比すると情報学部では圧倒的な就職の強さを誇っています。それでも、例年であれば、この時期90%以上の内定者が報告されておりましたので、予断を許さない状況にあることは変わりありません。「潮目の変化」に早々に対応できた学生と、前年度までの好況感に引きずられた学生との差が大きかったものと思われます。引き続き、未内定者のためのフォローアップに尽力しているところです。

専門家の一致した見解では、次年度も就職不況は依然続くようです。そのような厳しい環境との対峙において、インターンシップ経験などは企業への格好のアピール材料を提供してくれます。学生の早期キャリア意識の先鋭化のみならず、制度面での充実をも睨んで今後に臨んでいく所存です。引き続き、保護者の皆さま方からの御支援・御協力を賜りたく御願い申し上げる次第です。

▲3年次生によるインターンシップ準備報告会（2009/7）

学位記授与式・卒業祝賀会の報告およびご案内

平成21年3月、第57回静岡大学学位記授与式・第8回大学院情報学研究科学位記授与式が、浜松市教育文化会館「はまホール」において開催され、情報学部卒業生（情報科学科99名、情報社会学科96名）、大学院情報学研究科修了生55名に、学位記が授与されました。引き続き、卒業祝賀会が浜松名鉄ホテルにおいて開催され、卒業生の旅立ちを共に祝いました。

本年度につきましても、学位記授与式を平成22年3月22日午前10時から、浜松市教育文化会館「はまホール」において開催いたします。学位記授与式につきましては、保護者様席を設けさせていただきますが、充分な席数を確保することが困難であることを予めお詫びいたします。また、卒業祝賀会は浜松名鉄ホテルにおきまして、同日13時から行われる予定となっています。こちらは卒業・修了生と教職員のみの祝賀会となっておりますので、ご理解を賜りますようお願いいたします。

（情報学部学生委員会）

▲卒業祝賀会　於　浜松名鉄ホテル（2009/3/22）

【留学についてのご案内】アメリカ合衆国ネブラスカ大学オマハ校集中語学プログラム（ILUNO）

〈留学期間〉16週または8週
〈費用〉授業料免除あり。私費での参加可能。
〈説明会〉海外留学フェアーの中で、授業料免除受講生募集の説明会は例年10月に開催。

※ILUNOで取得した単位の認定についての詳細は「全学教育科目履修案内」の「本学以外の教育施設等における学修の単位認定に関する申合せ」を参照して下さい。

平成21年（2009年）度後期　行事予定表

2009年	
10月1日	授業開始
11月14日・15日	静大祭・テクノフェスタ（浜松キャンパス）
11月14日	保護者懇談会・面談（全学年の保護者対象）
11月21日・22日	静大祭（静岡キャンパス）
12月22日	集中講義（～25日）
12月26日	冬季休業（～1月4日）
2010年	
1月5日	補講日
1月6日	授業再開
2月4日	授業終了
2月5日	後期試験（～12日）
3月21日	学位記授与式（静岡）
3月22日	学位記授与式（浜松）・卒業祝賀会
3月25日	春季休業（～31日）

情報学部のウェブページをご覧ください。

情報学部では、保護者・受験生・社会人・一般・企業の皆様向けに学部のウェブページを公開しています。最新情報が掲載されていますので、どうぞご覧ください。

http://www.inf.shizuoka.ac.jp/

お問い合わせ
〒432-8011　浜松市中区城北3-5-1
静岡大学情報学部事務局
TEL.053-478-1501　FAX.053-478-1503
E-mail：prcom@inf.shizuoka.ac.jp